留学生から学べ!

ベネズエラからの留学

Luis Rodriguez

シュルンベルジェ株式会社

1 はじめに

筆者は南米ベネズエラのカラカスで生まれ、13年前に来日した。6年間、東京工業大学で研究生、修士及び博士課程学生として過ごした後、アカデミックの世界からビジネスの世界へと方向転換した。ここでは、筆者の日本でのこれまでの経験と、これからの展望についてお話しする。

2 地球の反対側から

御存じの方も多いかもしれないが、南米ブラジルの北に位置するベネズエラは、地球儀で見ると日本のほぼ反対側に位置しており、よほどの強い意志がない限り来日することは簡単なことではない。しかし筆者は、日本の文化とテクノロジーへの強い関心から、「日本へ必ず行くんだ」という強い意志を持っていた。

子供の頃、日本の文化を紹介した本に出会った。その本には、江戸時代と明治時代の暮らしはどうであったか、そして第二次世界大戦後、日本はどのように発展していったかが記してあった。その本を通じて、日本人の細部へこだわる点や、完全主義である点を知り、とても印象深く思ったものであった。

そして、ベネズエラのシモン・ボリバル大学4年生のとき、日本のテクノロジーへの関心がより高まると同時に、子供の頃から抱いていた日本への思いも一層強くなり、日本へ行こうと決意した。具体的には、文部科学省の奨学金制度に応募し、日本への留学を目指すことに決めた。多くの困難や厳しい競争と試練をくぐり抜け、やっと日本行きの切符を手に入れた。もちろん、奨学金の試験は1回で合格したわけではない。一度目に不合格だったときは

とてもショックで、日本に行くことが夢にまで出てくるほどであった。それでも諦めずに、日本への情熱を胸に引き続き努力を続け、翌年に再度トライし、とうとう試験に合格して日本への留学をつかみ取った。

3 いざ日本へ、そして最初の壁

日本では、まず研究生として、東京工業大学の安藤・廣川研究室にお世話になった。研究室では、アンテナ開発と回折理論の二つを柱に研究を始めた。初めに、回折理論と電磁波理論の研究が面白いと感じ、後に回折理論に絞ることにした。

日本に初めて来た日のことは、今でも覚えている……。ベネズエラでは皆スペイン語を話し、文字もアルファベットを使うが、日本では思ったとおりベネズエラとは全く違っていった。そう、筆者にとって「日本語」が最初の壁であった。しかし、研究室の皆さんのサポートのお陰で、最初の難関を乗り切れた。またベネズエラ人たちは、ストレートにものを言うことが多いが、日本では「遠回し」な表現を用いることが多く、子供の頃に読んだ、日本の文化を紹介した本の印象と少し異なり、戸惑いを感じたのを覚えている。

図1 アレックス・ラミレス氏と一緒に

図2 安藤教授と筆者

図3 ISAP 2005 韓国にて

図4 2005 URSI Young Scientist 賞受賞。
当時のインドのアブドゥル・カラム首相と若き研究者たち (India)

日本に来た最初の年にも、専門分野や日本の文化を学ぶ機会が多くあった。東京工業大学では、世界中のほかの大学では滅多に読むことができない、200年前に書かれた回折理論と電磁波の原書を読むことができ、私たちが今手にしている様々な理論を当時どうやって考え付いたのかを知ることができた。日本の文化については、新入生歓迎会、花見、夏合宿や忘年会に参加することを通じて学んだ。また、常夏のベネズエラ(図1)から来た筆者にとって、日本で迎えた最初の冬はそれまで体験したことのない寒さで大変な思いをしたのを覚えている。

そして最初の年に、ずっと心の中に温めてきた、修士課程に進みたいという思いを研究室の安藤教授(図2)に伝え、試験を受け、見事合格できた。

修士そして博士課程在籍時に、研究室の皆さんを通して、日本人の勤勉さや、よく考えて物事に取り組む日本の文化についての理解が更に深まった。また、トップレベルの研究を続けられるだけでなく、日本や世界各国の著名な学会に参加したり、学術誌に論文を発表できる機会を得た(図3, 4)。

4 再び「変化」への挑戦

はるか彼方の国から来日して以来、難しいけれどやりがいのあることの連続であったが、特に大学での博士課程までの生活は、毎日学ぶことが多く、本当に楽しかった。しかし博士課程2年生になったとき、自分の弱点に気づき、それを克服しようと試みた。それは、博士号取得後にビジネスの世界に飛び込むことであった。普通なら、博士号を取得後は、研究者として学術界に残ったり、大学に残り教授になるというキャリアパスになるのであろうが、筆者は、ビジネスの仕組みについてもっと知りたいと思ったので、自分のこれまでの研究を通して得た知識が生かせる一般企業への就職を試みた。多国籍油田開発サービスのシュルンベルジェ株式会社のサプライチェーン本部が、その扉を開いてくれた。筆者がこ

れまで研究してきた分野とは異なるが、部品価格や製造プロセス、製品化までのリードタイム、製品の品質の交渉や、調達業者の財務分析などの業務があり、とてもやりがいのある仕事である。もちろん、大学での研究が、筆者のバックグラウンドを補強し、ビジネスに関わるテクノロジーを理解する手助けとなっていることは、言うまでもない。

5

今の日本での生活と、 これからの世界

13年の日本での人生の中で、結婚し、娘が生まれ、更にこれまでの学生・社会人生活での様々な出来事を通して育んできた友情に囲まれ、今では確実に日本は筆者のふるさとだと言える。全てが順調に見えるかもしれないが、筆者の中にはまだ成し遂げていないことがたくさんある。目まぐるしく変化する世界では、新たな試練が絶え間なく生まれる。新たなテクノロジーが世界の距離を近づけ、情報の流れを加速させる。私たちの社会はその変化に追いついて変貌を遂げることで、10年後、100年後の世界は今とは全く違う世界になっていると思う。世界と社会が、私たちに変化を要求している。周囲を見ると、通信、医療、環境、食品、エネルギーに関する政策など、状況は短期間のうちに大きく変化している。これらの変化を支えていくのは、世界的に広がる共同研究から生まれる新たなテクノロジーであると思う。

Luis Rodriguez

2001 シモン・ボリバル大卒。2002 東工大に研究生として入学。2003~2004 東工大大学院修士課程。2005~2008 同大学院博士課程。2008~現在シュルンベルジェ株式会社サプライチェーン本部サプライヤーマネージャー。